

Fig. 5. Power consumption of blower.

## 3) 送風圧の上昇

炉頂圧を上げた時の送風圧の上昇は、炉内通気抵抗の低下によつて炉内における圧力損失が小さくなるために、炉頂圧上昇分の 60~80% にとどまるといわれているが、本高炉における実績は約 65% となりほぼ予想通りであつた。

## 4) ガス灰の減少

高圧操業のメリットの一つであるガス灰の減少は本高炉においても認められている。また、火入以来のガス灰の発生も炉頂圧力の高い月には少い (Fig. 4 は除塵器で回収されたガス灰について)。

## 5) 送風機電力消費量の増加

高圧操業では同一送風量に対する送風圧が高いので、送風機電力消費量は増加するが、東田第 1 高炉用送風機では炉頂圧  $0.7 \text{ kg/cm}^2$  にすると、送風量  $1,000 \text{ m}^3$  当り約  $8 \text{ kWh}$  増加する (銑鉄 1 t 当り約  $11 \text{ kWh}$ )。

## V. 結 言

東田第 1 高炉は昭和 38 年 8 月 17 日より高圧操業に入り、9 月 6 日より最高炉頂圧  $0.7 \text{ kg/cm}^2$  での操業を続けている。11 月上旬までの操業結果では、出銑量  $1,500 \text{ t/d}$  (約 10% 増)、コークス比  $550 \text{ kg/t}$  (約 20 kg/t 減) に達し更にガス灰の減少が認められた。

## (24) 低造滓量における高炉操業について

八幡製鉄所、技術管理部 島田正利  
〃 製銑部

中村一夫・村井良行・○水野葆緑  
Low Slag Volume Operation of Blast Furnace.

Masatoshi SHIMADA, Kazuo NAKAMURA,  
Yoshiyuki MURAI and Yasuyoshi MIZUNO.

## I. 緒 言

近年高品位輸入鉱石の使用増大とともに造滓量は低下の傾向をたどつておる、従来高炉操業に最適といわれた  $300\sim350 \text{ kg/t}$  の造滓量確保が困難となることが予想されるので低造滓量で高炉操業を行なつた場合の、銑鉄トン当たり所要熱量、コークス比、成分変動、脱硫など各項目の変動を調査するため、昭和 38 年 3 月 26 日～4 月 11 日の間東田第五高炉において最低造滓量  $200 \text{ kg/t}$  までの操業試験を行なつたので、その結果を総括する。

## II. 試 験 計 画

造滓量  $300 \text{ kg/t}$  のときを比較基準とし、造滓量  $250$ ,  $200 \text{ kg/t}$  の二水準について、各々 5 日、10 日間保ち、各水準間に 3 日間の調整期間をおくこととしたが、ストライキ操業などのため、 $200 \text{ kg/t}$  水準には 4 日しか保てなかつた。装入鉱石はブラジル (31·1%), インド

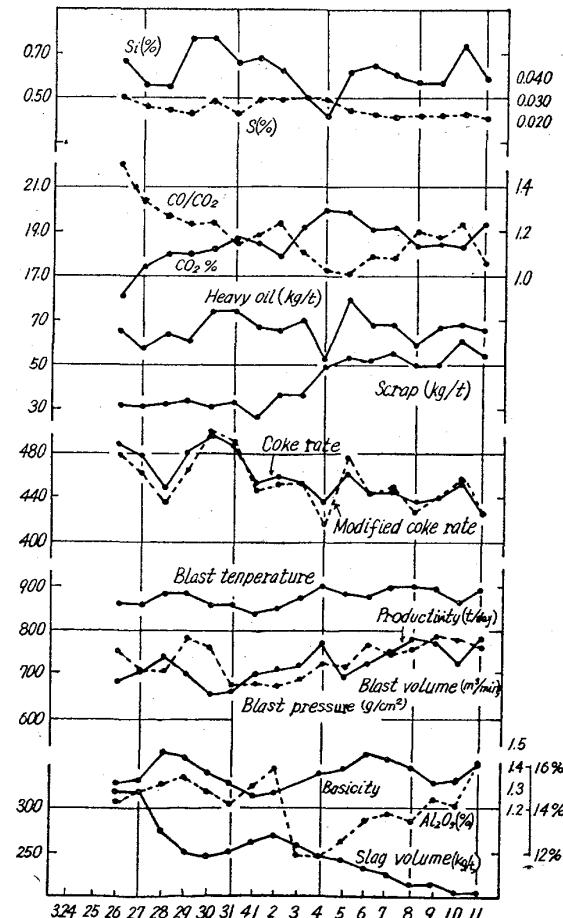


Fig. 1. Operating results.

Table 1. Operation Results.

Period	I	II	III	Period	I	II	III
	30 days	7 days	4 days				
Theoretical slag volume kg/t	313	250	211	Blast temperature °C	871	870	888
Weighed slag volume kg/t	329	294	212	Blast press./Blast volume	1·11	1·04	1·09
Productivity t/D	694	720	768	Top gas temperature °C	215	206	210
Coke rate kg/t	464	457	440	Top gas CO <sub>2</sub> %	16·8	18·5	18·6
Modified coke rate kg/t	457	454	438	" CO/CO <sub>2</sub>	1·38	1·18	1·17
Ore ratio	1·498	1·445	1·384	Si content in metal %	0·65	0·62	0·62
Ore/coke	3·23	3·18	3·17	S content in metal %	0·028	0·025	0·022
Heavy oil added kg/t	67	66	65	CaO/SiO <sub>2</sub> of slag	1·36	1·37	1·36
Scrap kg/t	37	42	54	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> content in slag %	14·62	14·17	14·57
Blast volume m <sup>3</sup> /min	722	710	710	Hang perday	0·71	1·16	2·25
Blast pressure g/cm <sup>2</sup>	799	736	774	Slip perday	0·19	0·29	0·50

Table 2. Sulfur balance.

Date	Slag		(S) %	(S)/[S]	Sulfur balance			
	Volume kg/t	CaO/SiO <sub>2</sub>			S charged kg/t	S into slag %	S into metal %	S into dust and error %
3.27	320	1·33	1·004	38·6	3·69	88·6	7·3	4·1
28	277	1·46	1·046	41·9	3·66	80·4	6·8	12·8
29	250	1·43	1·163	50·6	3·53	85·0	6·8	8·2
30	246	1·36	1·141	40·7	3·64	80·6	8·0	11·4
31	252	1·32	1·206	52·4	3·64	84·4	6·6	9·0
4·1	262	1·25	1·109	38·3	3·52	87·5	8·8	3·7
2	269	1·27	1·040	35·9	3·46	86·1	9·0	4·9
3	258	1·31	0·960	32·0	3·57	74·6	8·7	16·7
4	247	1·36	1·003	34·6	3·33	78·4	9·3	12·3
5	242	1·38	1·112	44·5	3·59	80·0	7·5	12·5
6	234	1·45	1·197	52·0	3·46	86·1	7·2	6·7
7	227	1·43	1·094	52·1	3·47	76·4	6·3	17·3
8	215	1·39	1·072	48·7	3·37	72·8	6·8	20·4
9	217	1·32	1·140	51·8	3·48	75·3	6·6	18·1
10	206	1·33	1·174	51·0	3·45	75·1	7·2	17·7
11	206	1·40	1·277	60·8	3·42	82·4	6·7	10·9
Period I	313	1·36	1·231	44·0	4·35*	88·5	6·4	5·1
Period II	250	1·36	1·108	45·5	3·52	80·9	7·5	11·6
Period III	211	1·36	1·165	53·0	3·43	76·4	6·8	16·7

Note \* Include the period using H. S. C heavy oil.

(27·4%), 焼結鉱 (41·5%), マンガン鉱, 石灰石, 珪石で造渣量は珪石にて調整し主原料配合は一定に保つ他重油添加量, 雜原料使用量など造渣量以外の操業要因を変動させないよう留意した。

Table 3. Si, S in metal.

Period	I	III
Number of taps	32	32
Slag volume kg/t	313	211
Si	$\bar{X}$ σ	0·54 0·12
S	$\bar{X}$ σ	0·029 0·005
CaO/SiO <sub>2</sub>	$\bar{X}$ σ	1·31 0·04
		1·36 0·05

### III. 試験結果

試験期間中は長時間にわたる休風等の事故なく一応安定した操業状態であつた。操業試験結果を Table 1, Fig. 1 に示す。

### IV. 脱硫の検討

期間中の S バランスを Table 2 に示す。 (S)/[S] は

Table 4. Mean value of Si, S in metal.

Period	Jan.	Feb.	I	II	III
Si	$\bar{X}$ σ	0·66 0·06	0·64 0·09	0·65 0·10	0·62 0·09
S	$\bar{X}$ σ	0·030 0·003	0·026 0·003	0·028 0·004	0·025 0·003
CaO/SiO <sub>2</sub>	$\bar{X}$ σ	1·36 0·06	1·36 0·05	1·36 0·03	1·37 0·06

Table 5. Heat balance.

Item	Period	I		II		III	
		Kcal/t-pig	%	Kcal/t-pig	%	Kcal/t-pig	%
Heat input	Combustion heat of C to CO	812,871	63.9	774,698	63.3	738,000	63.1
	Reduction heat of ore by CO	42,172	3.3	48,168	3.9	46,618	4.0
	Sensible heat of dry blast	413,708	32.5	398,063	32.5	382,788	32.7
	Sensible heat of blast moisture	3,139	0.3	3,219	0.3	2,657	0.2
	Total input	1,271,890	100.0	1,224,148	100.0	1,170,063	100.0
Heat output	Direct reduction of SiO <sub>2</sub> , MnO, P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	52,079	4.1	46,055	3.8	45,409	3.9
	Solution loss	283,542	22.3	319,338	26.1	309,000	26.4
	Calcination of lime stone	34,588	2.7	40,493	3.3	33,744	2.9
	Heat of molten metal	300,000	23.6	300,000	24.5	300,000	25.6
	Heat of molten slag	140,850	11.1	117,000	9.5	95,400	8.1
	Decomposition heat of moisture in blast	21,658	1.7	15,996	1.3	12,330	1.0
	Enthalpy of moisture in top gas	45,668	3.6	29,356	2.4	25,284	2.2
	Sensible heat of top gas	147,008	11.6	136,988	11.2	127,604	10.9
	Heat loss	226,397	17.8	218,922	17.9	221,292	18.9
	Total output	1,271,890	100.0	1,224,148	100.0	1,170,063	100.0

ばらつきが大きいが、造滓量の低下と共に上昇の傾向を示している。しかし鉱滓へ逃げる S の割合は減少し、全体の脱硫能は低下した。また造滓量の低下とともに、ガス灰、ガス化、誤差項などに出た S は上昇しており、これが滓中 S のばらつき増大によるものか、ガス化 S の増大によるものか明らかでない。

#### V. 銑鉄成分の変動

各期間中 [Si] は変化なく、[S] は造滓量と共に低下したがこれは装入 S の減少によるものと思われる。造滓量低下にともなう成分変動を調べ Table 3, Table 4 に結果を掲げる。この結果から造滓量が低下しても Si, S の変動はほとんど変らず塩基度は若干変動が大きくなっている傾向がうかがわれる。

#### VI. コークス比に関する検討

試験期間短かくコークス比の比較にはデータが不十分であるが造滓量 100kg/t の低下により 19kg/t のコークス比低下をみた。しかし Table 1 よりみれば I と II の差異は小さく、造滓量が大幅に低下した III においてコークス比が低下した結果になっている。炉頂ガス中 CO<sub>2</sub>% の上昇は平炉使用中止による石灰石原単位の増大が含まれている。コークス比低下は鉱滓損失熱、石灰石分解熱、ソリューションロス出熱の増加によるものと予想されるのでこの間の熱勘定を Table 5 に掲げる。

#### VII. 炉況および出滓作業

風圧/風量には大きな変化はなかったが、Table 1 にみるように棚スリップは増加した。しかしこれは比較期間 (I) と試験期間 (II), (III) では使用原料が変化しており、特にブラジル鉱石の熱間割れの影響などが考えられるので単に低造滓量のためとはいがたい。出滓作業には大きな変化はなく、良好であった。

#### VIII. 総括

イ) 東田 5 高炉において昭和 38 年 3 月 26 日～4 月 11 日まで低造滓量試験を行ない、211kg/t の造滓量で 4 日間操業した。

ロ) 造滓量 60, 100kg/t の低下でコークス比 3, 19 kg/t の低下をみた。

ハ) 熱精算結果では造滓量 100kg/t 低下で鉄鉄トン当たり所要熱量は約 12 万 kcal 低下した。これは溶滓損失熱、炉頂ガス損失熱の減少よりもたらされたものである。

ニ) 銑鉄成分、塩基度には大きな変動はなかつた。

ホ) 造滓量低下と共に棚スリップが増加したが、これが低造滓量のみに基因するものかどうか明らかでない。

#### (25) 溶鉱炉における流鉄現象について

富士製鉄、広畠製鉄所

若林敬一・江崎 潤・工博 神原健二郎  
工博 宮川一男・○金森 健・菅木勝彦  
About Iron Flushing from Cinder  
Notch of Blast Furnace.

Keiichi WAKABAYASHI, Kiyoshi EZAKI,  
Dr. Kenjiro KANBARA, Dr. Kazuo MIYAGAWA,  
Ken KANAMORI and Katsuhiko CHISAKI.

#### I. 緒言

溶鉱炉の出滓口から鉱滓とともにでてくる熔銑を流鉄と呼んでいるが、この流鉄がしばしば出滓口羽口を破るために、鉱滓を十分排出できず、溶鉱炉操業に支障をきたすばかりでなく、出滓作業に危険をともなう。従来、溶鉱炉操業者は、この流鉄を防止するため、原料面でチタン装入量を減じ、溶鉱炉内をクリーニングして、チタンにより生成した炉床隆起物を除去し、操業面では、熱めになるのを防いでチタン酸化物の還元をおさえ、実際作業では、流鉄ができると、一旦出滓作業を中止して出銑し熔銑面を下げてから再び出滓したり、出滓口から金棒を指し込んだり空吹しをしたりして十分開口し、鉱滓の流出を容易にしている。これは流鉄の原因が、溶銑面上の上昇による溶銑の鉱滓への巻込み、または、出滓口附近に壁ができて溶銑がたまりこれがおし出される、または、チタンにより溶銑あるいは鉱滓の粘性が大きくなり